

農林水産大臣賞受賞

～ファンが集う奇跡の集落～
拝啓 五名は元気です

ごみょうかっせいかきょうぎかい
受賞者 **五名活性化協議会**
(香川県東かがわ市)

代表者 おぎた 小北 かつらぎ 逸郎

■ 地域の沿革と概要

東かがわ市は香川県の最も東に位置し、北は国立公園瀬戸内海東部の播磨灘に臨み、南は阿讃山脈を境に徳島県と隣接している。高松市と徳島市のほぼ中間に位置し、豊かな自然環境と瀬戸内特有の温暖で穏やかな気候に恵まれる。平成15年4月1日に引田町、白鳥町、大内町の合併により誕生し、総面積153.35km²と県下17市町で5番目に広いが約6割を山林が占め、人口は約29,300人と県下8市の中で最も少ない。

産業別就業者割合は第1次産業が9%、第2次産業が36%と県平均と比べ高く、農家1戸あたりの耕地面積0.95haは県平均より広いが、農業産出額(H29推計)は24.6億円と県全体の3%に満たない。

市の農作物としては、イチゴ、パセリ、ブロッコリー、アスパラガス、ミニトマト等がある。

地場産業では全国シェア9割を超える手袋製造を中心とした「皮・繊維製品製造業」や、世界初のハマチ養殖発祥の地としても知られる「養殖漁業」、和三盆糖の製造販売など伝統産業を今なお受け継いでいる。

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	23自治会	
地区の性格	機能的な集団等	
農家率 (内訳)	農家率	52.3%
	総世帯数	132戸
	総農家数	69戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	22戸
	1種兼業農家	0戸
	2種兼業農家	27戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	2,184ha
	耕地面積	43ha
	田	33ha
	畑	2ha
	樹園地	3ha
	耕地率	2.4%
	農家一戸当たり耕地面積	0.9ha

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

五名地区は、徳島県との県境付近で海拔 250m 程の山間部に位置する。唯一の公共交通機関である路線バスは平日 3 本、土日は 1 本のみ運行し、市内中心部となる JR 高徳線・三本松駅まで約 30 分を要する。人口は昭和 40 年代前半まで 1,000 人を超えていたものの、現在では 132 世帯 283 人まで減少。高齢化率は 56%と市内でも極めて高齢化が進んでいる地域である。

周辺には、湯治や遍路宿として人気がある「白鳥温泉」や、乳神様としても祀られる「大イチョウ」、「五名ダム」などの観光名所にも恵まれる。

五名地区から西へ車で約 10 分の場所に位置する四国霊場八十八番札所「大窪寺」は、最後の札所であることから「結願（けちがん）の寺」として知られ、多くのお遍路さんで賑わう。大窪寺から一番札所の霊山寺（りょうぜんじ）を目指す“歩き遍路”の姿は、五名地区の日常的な光景となっている。

2. むらづくりの基本的特徴

（1）むらづくりの動機、背景

転機が訪れたのは平成 13 年 7 月。高松市内の商店街で、五名を紹介する展示会をしてみないかと声を掛けられたのが発端だった。せっかく宣伝するのなら、実際に五名へ来て、地域の良さを知ってもらう場所が必要という声が高まり、地元の特産品を販売する直売所を開設する計画が持ち上がると、瞬く間に様々なアイデアが集まった。

野菜や加工品、竹工芸品。さらには地元のアマチュアカメラマンが撮影した四季折々の風景や、五名小学校の活動紹介など、ふるさとへの愛情が詰まった展示会は大成功。反響も大きく、大勢の方が五名を訪れた。そこで、継続的に五名の特産品を発信するため、住民たちの手で直売所の運営を続けることに。五名郵便局の旧局舎を利用した直売所は「ふるさとの家」と名付けられ、五名の交流拠点となった。その後、平成 17 年の小学校廃校を契機に、文化祭の引き継ぎをはじめとする地域の課題解決に取り組む協議会（当時 五名活性化対策委員会）を立ち上げることとなった。

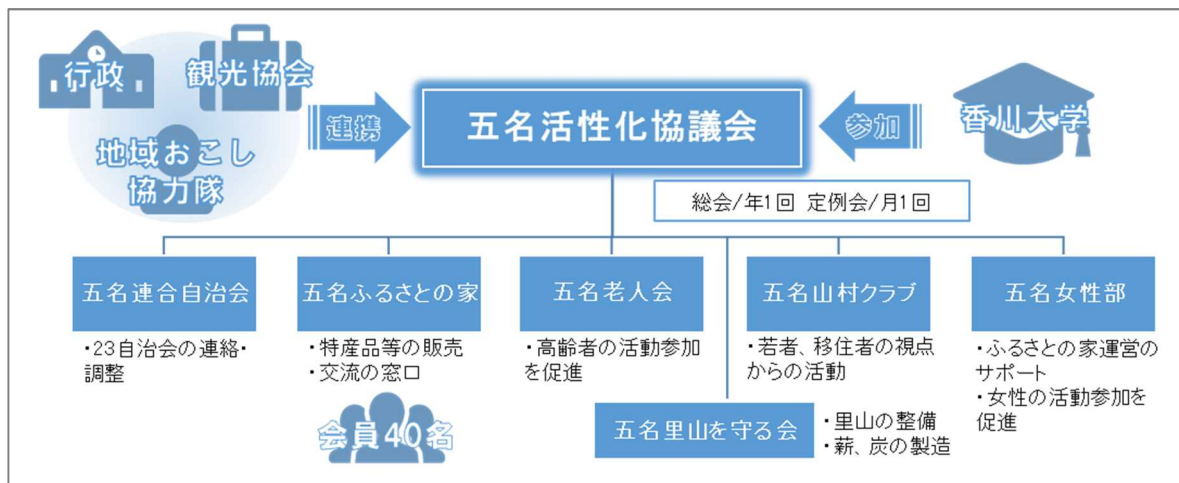
（2）むらづくりの推進体制

当初は、連合自治会、ふるさとの家運営組織、老人会、山村倶楽部（青年会）、女性部が参加して、地域の課題を話し合う場として「五名活性化対策委員会」を設立したものの、各組織の活動が活発化するにつれて協力者も次第に増加。事業の拡大によってステークホルダーも多様化したことから、新たな地域活性化を目指すため、平成 25 年に「五名活性化協議会」がスタートした。年 1 回の総会のほか、月 1 回の定例会を開催して、取組方針や事業進捗を確認しながら運営している。

現在では、里山の整備を担う「五名里山を守る会」、地域創生を担当する行政・観光協会・地域おこし協力隊、地域づくりを学ぶ香川大学の学生た

ちとも連携・協力しながら事業推進にあたっているほか、ふるさとの家運営には会員制を導入し、地区住民約 20 名が交代で店番などを行っている。

第 2 図 推進体制



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

五名地区は周囲を山に囲まれる農山村地域であり、全国で同様の地域が抱える「人口減少や高齢化の進行に伴う限界集落への危機感」を、早くから地域で共有した点で先駆的と言える。また、農林業の担い手問題、田畑の鳥獣害問題、高齢者の買い物難民問題など、現状と課題を正しく認識したうえで、農林業研修生の受け入れ、ジビエ肉への利用、直売所の開設など、再生に向けて的確な対策を議論し、実践できる自走体制が整っている点も特徴的である。

農泊やグリーンツーリズムにも早くから着目し、豊かな自然と地域資源を最大限に活用したイベントや体験型コンテンツを構築。ホームページや SNS を利用した情報発信も奏功し、田園回帰志向の強い都市住民の共感が得られたものと推察される。

ふるさと祭りをはじめとした交流イベントなど、交流人口拡大を図る仕掛けと、直売所の運営や薪・炭の販売など、雇用を生み収入を得る仕掛けが相乗効果を生み、ファン獲得に成功した五名だが、すでに将来を見据えた取り組みに着手している。五名の特産品や民芸品を紹介・販売するカタログ「五名便り～拝啓 五名は元気です～」をこれまでに 3 パターン制作するなど、積極的なプロモーションに取り組み、利益を生み出す重要性を意識づけている。今年 7 月にはカフェスペースを併設した新たな直売所がオープン。五名在住の陶芸・工芸作家やアーティストの作品も展示され、さらなる地域コミュニティの深化が見込まれる。

2. 農業生産面における特徴

(1) 「ふるさとの家」を通じた五名産農産物の販売

毎週土曜にオープンする「ふるさとの家」には、五名産の新鮮な野菜や加工品・工芸品が並ぶ。品揃えも幅広く価格設定も良心的なため、地区内外から多くの買い物客が訪れている。売上金のうち9割を商品提供者へ、残り1割を運営費に充てている。また、単なる直売所ではなく、地域のPRや交流が図られる場とするため、売りに隣接して五名の風景写真を展示した喫茶スペースを設けるなど、住民たちが自らの手でリフォームした内装も魅力の一つであった。一角に設けられた食堂スペース「ふるさと茶屋 杉菜」では、イノシシカレーうどん、イノシシ餃子などのジビエメニューを提供。杉菜のオープンを契機に、遠方客や若者客の来店が増えたことで、売上げアップはもちろんのこと、地区内外の交流人口増加による賑わいづくりにもつながっていた。



写真1 ふるさとの家販売の様子

長年使用してきた郵便局旧局舎の老朽化に伴い、今年7月に新しい「五名ふるさとの家」がオープン。営業日も金曜から月曜までの4日間に拡大し、新鮮な季節の野菜や総菜の販売に加えて、カフェでは五名で捕獲されたイノシシ等の肉を使ったジビエランチを提供している。

(2) 里山活性化プロジェクト

農地周辺の荒廃した山林を整備して、里山づくり、鳥獣害対策、資源の有効活用を一体的に行う「里山活性化プロジェクト」を平成18年から始動。里山整備に伴い伐採した木材は椎茸の原木、薪、炭などに加工し、東かがわ市のふるさと納税返礼品として全国に発送され、好評を博している。

また、来訪者を迎えるため、地元木材を使った手作りの案内看板や東屋を設置したり、木のボールペンを商品開発するなど活動の幅を広げている。このボールペンは平成29年11月に開催された全国育樹祭の記念品にも採用された。



写真2 里山整備の様子

(3) 新たな名物「五名ジビエ」

イノシシ等による農作物被害が深刻化していたが、里山の整備を進めたことで被害も減少し、獣害対策としても成果が表れている。また、捕獲したイノシシは地区内の食肉処理施設「五色の里」で食肉に加工され、ふるさとの

家で販売されているほか、ふるさと茶屋杉菜ではジビエメニューとして提供。イノシシ肉は薪、炭に続く五名の新たな名物として、ふるさと納税返礼品にも採用されている。

昨今のジビエブームを追い風に、県内外のレストランにも出荷されるなど販路を拡大。現在、皮革利用も検討されており、事業が軌道に乗ったことで、今では雇用を実現している。

(4) 五名ジビエをPRする「いのしし祭り」の開催

五名三大祭りの1つ「いのしし祭り」は、毎年12月にふるさととの家の周年記念行事として開催される。五名が誇る自然の恵みに感謝するとともに、五名ジビエを発信する当祭りでは、イノシシカレーうどんとイノシシ汁の無料ふるまい、イノシシの丸焼き、イノシシカレー、イノシシ丼、イノシシ焼きそばのほか、あめご塩焼き、山菜おこわなどのバザー販売や、新鮮野菜の直売が大人気。サックス演奏や“ししきらーず”によるマリンバ演奏、宝探し大会などのアトラクションも行われる。企画段階から香川大学の学生も参加しており、盛り上げに一役買っているところである。



写真3 名物イノシシの丸焼き

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 移住者受入れプロジェクト

移住希望者には事前に体験宿泊や地域行事への参加を促し、地元住民との交流の場を設けるなど、五名の地域性を知ったうえで移住を検討してもらえよう、地域全体で支援している。住宅には地区内の空き家を提供し、これまでに14組34人の移住が実現した。移住者夫婦の間には子どもも誕生。子育てにも地域を挙げて積極的に関わり、大自然の中で豊かな心身を育む情操教育に貢献している。

移住者による取組みも様々。林業、陶芸づくり、家具づくり、カフェや美容室の開業、地ビール製造など、個性あふれる多様性が五名の魅力を引き立てている。



写真4 移住者を囲んで

(2) 地域の絆を深める「ふるさとまつり」の開催

五名三大祭りの1つ「ふるさとまつり」は、毎年8月13日に開催される地域の夏祭りで、東かがわ市ならではの“手袋音頭”による総踊りや地元出身

歌手の歌謡ショー、手作りバザーなどで賑わう。カラオケ大会では、即興の芝居や楽器の演奏など地元の芸自慢たちが活躍。老若男女が集まる交流イベントとして、また、お盆に帰省した五名出身者たちの再会の場としてもその役割は大きい。

(3) 小学校の文化祭を今に紡ぐ「山びこ文化祭」

五名三大祭りの1つ「山びこ文化祭」は、毎年11月に開催される地域の文化交流イベントで、平成17年に廃校となった五名小学校の文化祭を引き継ぐ目的でスタートした。野外ステージでのバンド演奏や地域住民による発表会・展示会のほか、地元の陶芸・工芸作家の作品即売会とワークショップも同時開催。ジビエ料理や地ビール、地元の食材を使ったバザー販売もあり、地域住民が音楽や芸術に触れ合える唯一のイベントとなっている。

(4) 五名体験型コンテンツの発信「五名で遊ぼう」

地元住民がプロデュースする五名体験型コンテンツをまとめて「五名で遊ぼう」と題して情報発信。年間を通じて、農業体験、織物体験、藍染め体験、陶芸体験、うどん打ち体験、料理づくり体験、里山ハイキングなどのコンテンツを取り揃え、地区外からの来訪者を受け入れている。毎年4月のリリースと同時に予約が殺到する人気コンテンツも。

ほかにも、体験農園、アメゴ養殖場、山遊びの体験教室など常時受け入れ可能な施設もあり、何度も五名を訪れるリピーターの獲得に成功している。

(5) 五名の全てが分かるマップづくり

地元住民の声から、五名の良さを再認識できるマップづくりのアイデアが浮上。五名の名所や飲食店、体験型コンテンツを網羅した「五名マップ」を作成したところ、今や五名の案内に欠かせないツールとなった。食べる・見る・楽しむをコンセプトに五名の魅力を余すところなく発信している。五名在住のイラストレーターが制作しており、心和むタッチが印象的。



写真5 五名マップ

(6) 滞在拠点となる農家民宿「五名やまびこの宿」

空き家となっていた古民家を農家民宿「五名やまびこの宿」として整備したところ、帰省者や移住希望者のほか、大学の研究室やスポーツ少年団などの団体客、さらには外国人観光客も利用するなど五名の滞在拠点となっている。縁側に腰かけながら、庭先で楽しむイノシシ肉BBQは絶品。一棟貸しのうえ隣家がないため、暗闇の中で満天の星空と川のせせらぎを思う存分堪能できる。おはぎづくり体験や五右衛門風呂も人気である。